

ライの冒険

～魔王をたおせ～



じーと 澤田

ver 1.0

【プロローグ】

ライの膝はガクガク震えていた。
どうやったって、とまりやしない。

目の前には大きな石のトビラが、
ライの行く手を阻むように、悠然とそそり立っている。

『このトビラを開けて、中に入ってしまったら、
もう二度と出てくることはできないのではないか・・・』

そんなことを考えると、ライの手も足も石のように重く、
硬く感じられて、ライは一步も動けなくなっていた。

体とは裏腹に、心臓の鼓動だけが、
限界近くまで狂ったように激しく暴れているのだが、
この心臓の鼓動も、手足と同じように、
重く、硬い石のように、動きを止めてしまうのかもしれない。

『どうしよう。』

ライは中へ入るべきか、引き返すべきか、
どちらとも決められずに、ためらっていた。

この大きな石のトビラの向こうにあれがある。
あれを手に入れば、長かった自分の旅も終わりとなる。

みんなが待つ、自分の村に帰れるのだ。

ここまでの旅路を、ライは走馬燈のように思い出していた。

【第一章】

「村を救うのは・・・、ライ、お前だ。やってくれるか。」

村長さんにそう告げられた時には、心臓が止まるかと思った。

「なんで、ぼくなんですか。
もっと、年上の人でもたくさんいるし、ぼくより勇敢な人は、
たくさんいるじゃないですか。ぼくには責任が重過ぎます。」

「村一番の物知りな長老が、お前を選んだのじゃ。
この旅の成功には、大勢の人間と関わることでできる力が
もっとも必要とされるそうなんじゃ。ライ、村の中で一番多
くの人間と交流を持っているのはお前じゃ。
これはみんなが認めるところじゃ。
お前は誰にでも同じように挨拶をし、みんなの話をいつも真
剣に聞いている。そんなお前のやさしい、誠実さを
長老はお選びになったようじゃ。」

長老様に逆らえるはずもない。
村人みんなの期待が、痛いぐらいに、ぼくの小さな体に
刺さっているのを感じる。

今年に入ってから、村では元気を失い、
全身に力が入らなくなる病人が増え続けていた。
お医者さんもお手上げで、原因が全然分からない。

古い書物の中から、昔、同じような症状の病人に、
ある薬草が効いたという記録を見つけた。
その書物に書かれていることを頼りに、薬草を採りに行く人
間を、村人から一人選ぶことになったのだ。

まさか、自分が選ばれるなんて・・・。

ぼくはこの村を出たことがない。

となり町は3日ぐらいは歩き続けなくてはならず、
まだ小さいぼくにはちょっと無理だと思っていた。
そんなぼくが、村を出る決心をしなくてはいけなくなった。

大人になったら、村の外を見てみたいとは、おぼろげながら
に思っていたが、その日がこんなに早く来ようとは・・・。

村人たちに取り囲まれながら、村長さんの前に立ちすくんで
いるぼくは、決断を下さなくてはならなかった。

みんなの期待がヒシヒシと伝わってくる。
断れるはずもない。

「分かりました。やってみます。」

わ～～～！、と歓声が上がった。

「ありがとう、ライ。よくぞ決意してくれた。
村の未来をよろしく頼むぞ。」

村長にそう言われ、地図と刀を渡された。

その時・・・、
耳元で、『自分の人生を自分で切り開く』
そう、ハッキリと声が聞こえた。

「えっ。」

あたりを見回したが、
そんな近くでぼくに話しかける人は見あたらない。

「んっ、誰の声だ？確かに聞こえたよな。
『自分の人生を自分で切り開く』って。」

早速、身支度を調べ、翌朝、薬草を採りに
ぼくは一人で旅に出ることになった。

【第二章】

やっとの思いで、たどり着いたとなり町は、
それはそれは大きな町だった。

こんな大きな町で、本当に薬草を見つけることができるのか。

ライは心配になった。

とにかく、情報を集めようと、
ライは、いろいろな人に話しかけはじめた。

まず、ビックリしたのは、とにかく人が多い。

ライの村とは、比べものにならない。

人をかき分けていかないと、前に進むことができず、ライは
歩くだけで、クタクタになってしまいうぐらいだ。
話しかけてみると、いろいろな人がいることも、分かってきた。

ライの村の人たちはみんな、物腰が柔らかく、やさしい人ばかりだったけど、この町では違う。

話しかけても、全然、口をきいてくれない人もいるし、最初からけんか腰の人もある。

「いろいろな人がいるんだなあ。」

ライはあまり嫌な思いをしないですむように、やさしそうな人を選んで、話しかけるように心がけた。

とにかく、大勢の人に聞いて回ったが、得られる情報は似たものが多く、薬草がどこにあるのか、有力な手がかりは得られないまま数日が過ぎた。

「どうしたらいいんだろう。
薬草なんて、ホントにあるんだろうか。」

疲れ果てたライは、道端に座り込み、うなだれていると、誰かが話しかけてきた。

「違うタイプの人間に聞いてみる。」

「この声は、あの時の声だ。」

ハッとして、顔を上げてみたが、案の定、周りには誰もいなかった。

村長さんの前で、ライが旅に出ることを、決意した時に、聞こえた声と、同じ声だった。

**「いったい、どういうことだ？
声はすれども、姿は見えない。」**

周りを見渡すが、やはり、声の主らしい人は見あたらない。

**「たしか、『違うタイプの人間に聞いてみる。』って。言っ
てたな。ぼくにアドバンスをしてくれているのだろうか？」**

**ライは、声の主が、どうも自分のことを
見守ってくれているように、感じられたきた。**

**「違うタイプの人に聞けば、違う情報が聞けるのだろうか？
今まではやさしいひとを選んで、話しかけるようにしてきた
けど、ちょっとおっかなそうな人にも、聞いてみるか。」**

**さっそく、通りの向こうに、けんか腰に仲間と話をしている
人が目に入った。ライは勇気を出して、話しかけてみた。**

「なんだ、おめえ。うるせいなあ。あっちいけ！」

全然、話を聞いてくる気配はない。

**でも、ライはへこたれず、
今まで避けてきたタイプの人に、話しかけてみた。**

少しずつだが、ライの話を聞いてくれる人が出てきた。

**話し方が違うのは当然だが、おもしろいことに、
話す内容もこれまでのやさしそうな人達とは、
全然違うことが分かってきた。**

**正直、話し方、ものの考え方は、
あまり気持ちよいものではない。**

**でも、これまでの情報とは、
まったく違う話が聞けるのは確かだ。**

**これまでの人とは、根本的に興味の対象が違うようだ。
普段、行動している範囲も、まったく違い、
それぞれの情報ネットワークみたいなものが、
あることがライには段々分かってきた。**

**これまでとはタイプの違う人たちに、話しかけてみていたら、
違う情報を聞けるようになってきた。**

**どうも、おっかない人たちが、夜な夜な集まる酒場で、ライ
が探してる薬草の話題が、話に出ることがあるらしい。**

**その酒場に集う人たちに聞いてみれば、薬草のありかが分か
るかもしれない。
ライは、一大決心をした。**

「今晚、その酒場に行ってみよう。」

**『なんだ、小僧。
子供が来るようなところじゃないぞ。早く帰って寝ろ。』**

**おっかない人たちが、たくさん集まっている。
大声を上げて、ケンカしている人たちもいる。**

「こんな世界もあるんだなあ。この人たちに比べれば、

村一番の怒りん坊も、可愛いものだ。」

ライは何とか薬草の話を聞き出すことに成功した。

この町の北には深い森が広がっている。

魔物が住んでいると言われていて、

**あまり人はそこに入っては行かないようだ。
しかし、その森の中に、薬草は咲いているらしい。**

**お金欲しさに、酒場に集う連中は、北の森に入り、
薬草を採ってきて、売ったりしていたらしい。**

**以前は、森にさえ入っていけば、
割と容易に、その薬草を採ることができたらしいが、
みんなが無造作に採るうちに、段々その数は減り、
最近では、なかなか見つからなくなってしまったようだ。**

**今は、北の森の奥深くにある、魔王の城の中庭にだけ、
薬草は咲いているという噂だった。**

**「もう、行くしかない。
北の森に入って、薬草を見つけよう。」**

ライは決意を固め、北の森に入っていった。

ライは深い森の中を、ずいぶんと歩き回った。

やはり、薬草は見あたらない。

ほとんどみんな採られてしまい、
魔王の城に行くしかなさそうだ。

魔王の城に行くことを決意したのが、
森に入ってから3日目だった。

さらに森の奥へ深く入っていき、魔王の城を目指したライだったが、歩けど、探せど、魔王の城を見つけることができない。

森に入って1週間経ち、食料もそこを尽きてしまい、
ライは一度町に戻ることにした。

しかし、今度は、森を抜けて、町に帰る道が分からない。

すっかり、森の中で迷ってしまったようだ。

キノコや野草を食べ、川で水を飲んで、さらに1週間さまよ
い続け、やっとライは森を抜け、町に戻ることができた。

ライは宿屋に泊まり、布団に横になった。

2週間の疲れがどっと出て、ライは深い眠りに落ちていった。

その時、遠のく意識の中で、
あの例の声が聞こえてきた気がした。

『助けを求める』

ライは目を覚ますと、眠りにつく前の、

意識の薄れゆく時のことを、思い出していた。

「確かに聞こえた。あの声だ。
『助けを求める』と言っていたな。」

「どういうことだろう？」
ライはいろいろ考えた末、その晩、もう一度、
あの酒場に行ってみた。

そして、北の城まで案内してくれる人はいないか、
聞いて回った。

魔王が住むという北の城に、案内してくれる人など、そうそ
ういないだろうと、ライは思っていたが、予想は外れた。

あっけないほどに、道案内してくれる人を、見つけることが
できた。

ライはこの旅を自分一人の力で、頑張ってきた。

でも、他人に助けを求めることも、時には大切なのかもしれ
ないと、思い始めていた。

早速、旅の準備を整え、道案内の男と共に、北の森に入っ
ていた。

半日ほど歩いただろうか、まだそれほど疲れてもいない、
前回は1週間も、森をさまよったのに・・・、

あっけないほどに、
あっさりと、北の城にたどり着いてしまった。

木々の向こう側に、
大きな大きな北の城がそびえ立っていた。

いったい、ライの苦勞は何だったんだろう。

ライは道案内の男に、感謝の気持ちを伝えた。

道案内をしてくれた男は、城までの道案内という、
約束だったので、城が見えたところで、引き返していった。

さあ、とうとう、魔王の住む北の城に乗り込む時が来た。

ライの旅もクライマックスを迎えることになる。

ライは大きなお堀にかかる橋を渡り、
大きな門をくぐって、お城の中に入っていった。

【第三章】

ライの膝はガクガク震えていた。
目の前の大きな石のトビラのむこうに、魔王の間がある。

そこを通り抜ければ、中庭に出ることができ、
薬草を手に入れることができる。

薬草を手に入れれば、ライの旅はおわり、
村に帰ることができるのだ。

しかし、当然、魔王の間には、恐ろしい魔王がいるだろう。

村長さんにもらった、この剣だけで、魔王を倒すことが出来るのだろうか。

ライは大きな失敗をしていることに、今になって、はじめて気がついた。

薬草を手に入れることばかり考えていて、魔王との戦いについて、全く考えていなかったのだ。

「戦いの準備もせずに、このトビラを開けるのは、あまりに無謀すぎる。一旦、町に戻ろう。今こそ、『助けを求める』時だ！勇者でも雇って、一緒に戦ってもらおう。」

「ようこそ！」
あの声がした。

「えっ！」

ライがビックリして、キョロキョロあたりを見回してみるが、誰も周りにはいない。

その時、魔王の間の石のトビラが、ギ・ギ・ギ・ギーと開き始めた。

ライの体は硬直した。
一步も動けなかった。

石のトビラが徐々に開いていき、魔王の間の中が見えてきた。

奥の王座の前に、何者かがいる。

ライの体に鳥肌がたち、背中に冷や汗が流れた。

ライはやっとの思いで、腰の剣を抜いて、身構えた。

「ようこそ！ライくん。」

ライはビックリして、声も出せなかった。

**恐ろしい魔王の叫び声でも聞こえてきて、
魔王の攻撃が飛んでくるのかと、身構えていたのに・・・、**

**魔王の間から聞こえてきたのは、
やさしく聞き覚えのある、あの声だったのだ。**

**「ビックリさせてしまったかな。恐ろしい魔王でもいて、口
から火でも吹いているかと思っていたかな。
期待はずれで、申し訳なかったね。ハッハッハッ！」**

**王座の前には、ライが予想していた恐ろしい魔王の姿はなく、
やさしそうな、ステキな紳士が満面の笑みで立っていた。**

「ライくんだね。どうぞ、中にお入りなさい。」

**ライは口をポカンと開け、相変わらず、声も出せずに立ちつ
くしたままだった。緊張から一気に解放され、力が抜けてそ
の場に座り込んでしまいそうだ。**

「ライくん、君が薬草をとりにくることは、

村を出る時からずっと知っていたよ。
いや、もっと前から分かっていたので、ずっと見守っていたんだ。それが、私の仕事なんだ。

私の仕事は、薬草を必要とする人々に大切なことを伝えることなんだ。」

「あ～、よかった。
この城は魔王の城ではなかったのですね。
これで薬草を手に入れることができる。」

「君は自分の役目をしっかりと果たしたね。
素晴らしいことだ。もう、薬草はいらないよ。」

「えっ、ぼくは薬草を取りにきたんですよ。
早く薬草を村の人たちに届けなくちゃいけないんです。
村では元気を失い、全身に力が入らなくなった病人が
たくさんいて、困っているんです。」

「君が探しにきた薬草の名前を知っているかな。」

「・・・いえ、知りません。」

「『キヅキ』と言うんだよ。」

「『キヅキ』・・・ですか。」

「そう。
確かに薬草『キズキ』は君の村の病人たちには特効薬だ。
脳に作用して、考え方を柔軟にしてくれる働きがある。」

「そんな働きがあるんですね。」

「でも、それが本当の意味での病気の治癒に効くわけではない。本当に大切なのは、薬草を飲んだ後なんだよ。」

「薬草を飲んだ後ですか？」

「そう、君の経験がそこで役に立つ。」

「ライくん、君はこの旅で何を学んできたかな？」

「えっ、何を学んできたか・・・、う～ん、何だろう？」

「私は心を通じて、君に何度も語りかけてきたよね。」

**「あっ、やっぱり・・・、
あなただったんですね。はい、聞こえました。」**

**確か、最初は、『自分の人生を自分で切り開く』でしたね。
それから、『違うタイプの人間に聞いてみる。』
そして、『助けを求める』でした。」**

**「さすが、ライくん。よく覚えているな。
そこが君の素晴らしいところだ。」**

「あっ、ありがとうございます。」

**「君は誰だか正体の分からない、
声しか聞こえない私の助言を、
素直に聞き入れ、次の行動に活かしてきたわけだよね。」**

「はい。」

「だから、ここまで来ることができたんだ。」

「はい、あなたの声はいつも、自分の息詰まっている時に、聞こえてきました。どうしようもなかったのも、あなたの声を信じてみました。他にどうして良いかわからなかったのも・・・。」

「そうだな。進む方向がズレてしまい、適切な方向を見失っている時に、私は君に助言を投げかけるように心がけてきた。でも、息詰まった時に、心の声を聞き入れられる人は、結構、少ないんだ。息詰まった時だからこそ、これまでの自分の過去の経験や知恵に、しがみついてしまう人間が多い。ライくん、君はそんな場面で、他人の助言を受け入れるだけの、心の柔軟性を持っていたから、村長さんに選ばれたんだよ。そして、村で流行っている病気が、決して君に感染しない理由がそこにあるし、君が村人を助けることができる理由がそのポイントなんだ。」

「・・・？」

「ライくん、今の君の頭の中には、クエッションマークがたくさん飛んでいるようだね。」

「はい。もう、何が何だか分かりません。」

「よし、ひとつずつ整理して行こう。何から聞きたい？」

「薬草は分けてもらえますか？」

「ふ～む、確かに！今、君の一番の関心ごとは、薬草をもらえるかどうか・・・だね。」

「はい、そうです。」

「でも、本当に大切なのは、薬草が本当に必要なかどうか・・・、じゃないかな。」

「えっ、だってそんなこと言われても・・・、村長さんに薬草をとってくるように言われたんです。薬草を持たずに村に戻るわけにはいきません。僕がここまで旅してきた意味がなくなります。」

「確かにそうだ。でも、もし言われるがまま、持って帰った薬草が、全然病気に効果がなかったら、君の旅は、意味あるものになるかな？」

「えっ・・・、全く意味のない・・・、ものに・・・、なりますね。骨折り損のくたびれもうけ・・・に、なってしまいます。それは困ります。」

「そうだろ。」

「でも、僕には薬草の知識はありません。村長さんを信じて、言われた薬草を持って帰るしか、ないじゃないですか。」

「ライくん、君は賢い子だ。僕の3番目のアドバイスは何だったかな？思い出してごらん。」

「え〜と、『助けを求める』です。

・・・

「そうか、薬草に詳しい人に聞けばいいんですね。」

「ご名答！！」

「薬草の事を詳しく知っているのは・・・、
あなたです。
あなたに聞けばいいのですね。
お願いします。教えてください。」

「ふむ、本当に賢い子だ。
とても考え方が柔軟で、その時その時の状況に、
臨機応変に対応できる力を君は持っている。」

「ありがとうございます。
そこまでヒントを出してもらえれば、
さすがに分かりました。」

「では、薬草が必要かどうかをかんがえるために、
なぜ、みんなが力を失っているのか・・・、
そこを考えてみよう。分かるかな？」

「何かウイルスに感染しているのでしょうか？」

「いや、違う！その理由は2つあるんだよ。」

「ライくん、村の多くの人が元気を失い、
力が出なくなっている理由は2つある。知りたいかい？」

「はい、教えてください。」

「よし、いいだろう。
知りたいと思うことが、すべての始まりだ。
まずひとつに、『思い込み』だ。」

「えっ、『思い込み』！
『思い込み』で、みんな病気になっているんですか？」

「そうなんだ。
・・・でも、ライくん、
今、君が想像してることは、どうも、はずれたな。」

「・・・」

「ライくん、君はこう考えているね。
『自分は病人だ』と、みんなが思い込んでいる・・・そうではないよ。」

「あっ、違うんですね。そりゃ、そうですよね。(笑)」

「ハッハッハッ！
ライくん、やっと笑顔が出てきたね。
まあ、椅子に腰をかけて、ゆっくり話そうじゃないか。」

「ありがとうございます。
やっと、気持ちが落ち着いてきました。」

「ライくん、いいかい。
人間は、自分の過去の経験や教わったことをもとに、
様々な思い込みを心に創り出している。」

それは、この世の真実のほんの一部でしかないのに、
あたかも全てがそうであるような錯覚に落ち入り、
他のものを受け入れなくなってしまう。」

「へ～、そうなんですね。」

「私がライくんに伝えたアドバイスは3つあったよね。
それぞれ思い出してみよう。

『自分の人生を自分で切り開く』
世知辛いこの世の中で、自分の思い通りになんか人生は運ば
ないと、多く人間は思い込んでいる。
だから、自分の思いどおりの人生を切り開こう・・・、
なんて心から思っている人間はあまりいない。
ライくん、きみも、『自分はそんな大それたことをやれる人
間ではない』と思っていたよね。」

「はい、思っていました。」

「しかし、君は、その思い込みを手放し、自分で人生を切り
開く決意をした。その決意をしたから、私は君を応援するこ
とにしたんだ。君は前に進もうとしていたからね。」

さて、ライくん、
2つ目は、『違うタイプの人間に聞いてみる。』だったね。」

「はい、そうです。」

「そもそも、
人間はみな同じ考えをするものだと、思い込んでいる者が多
い。みんなと同じ考え方をすることが良いことだと思ひこみ、

**大多数と意見と違う考え方をすることは、いけない事だと思
い込んでいるんだ。**

**みんなが同じことをやり、同じ考え方で生きることがあるべ
き姿だと思込んでいるので、違う考え方をする人を許容す
ることができない。**

**違うタイプの人がいるかもしれない、と私の声を聞き入れる
ことのできた、君の柔軟な頭には本当に感心したよ。」**

「そうですか。照れますね～。ありがとうございます。」

「3つ目は、『助けを求める』だったね。

**基本的に、自分でなんでもやり遂げることが重要だと、
多くの者は思込んでいる。**

ライくん、君もそう思っただけじゃないかい？」

**「そうですね。やはり、自分でやり遂げてこそ、意味がある
と、思っていました。」**

「そうだね。

**自分で何でもやり遂げてこそ、一人前の大人になれたと、
多くの者は思込んでいるんだ。**

でも、考え方を少し変えてみよう。

みんな、他人の役に立ちたいという気持ちもあるよね。

**と言うことは、相手が役に立てるように、仕事を依頼するこ
とも、相手の助けになるということだ。**

**つまり、自分でなんでもやってしまうことだけが、
目指すゴールではないということだ。」**

「本当ですね。

**そう考えると、相手に助けを求めることも、
とっても意味のあることになりますね。」**

「世の中、持ちつ持たれつ、ギブアンドテイクなんだよ。」

「確かにたしかに。良く分かります。」

「こんな思い込みは、他にも無数にある。たくさんの思い込みをみんな心の中で、大切に育てているんだよ。」

**そして、その無数の思い込みによって、人は身動きがとれなくなっている。そのことに気がつかずに、日々過ごして、
年を重ねている、大人がたくさんいるんだ。」**

「大人になっても、一人前とは言えませんね。」

「いいところに気がついたね。その通りだよ。」

「う～ん、何が正しいのか、分からなくなってきたな。」

**「無数の思い込みを栄養にして、人の心の中では、
もっとも『大いなる思い込み』が育つことになる。
それが、みんなが力を失う、2つ目の最大の理由だ。」**

「2つ目の理由ですね。」

**「2つ目の最大の理由を引き起こす、
『大いなる思い込み』について、話をしよう。」**

「はい、お願いします。」

「人間は、何かをする時に、

『できた・できない』

『良い・悪い』

『あってる・あってない』

と、プラスかマイナスの、両極端な判断をすることが正しい・・・、と思い込んでしまっている。そうじゃないかい？」

「う～ん、よく分かりません。

確かに、そういう時もあるような気がします。」

「では、ライは今どう考えているだろう。

薬草を手に入れることができたかな？」

「いえ、まだ薬草を手に入れてません。」

「そうだね。

『手に入れていない』と言う判断をしているだろう。

つまり、『手に入れた』か、

『手に入れない』かの二つにひとつだ。」

「そうですね。じゃ、どう考えればいいでしょう。」

「『どう考えればいい』と言うのも、二つにひとつだ。

私だったらこう思うよ。

『どんな風に考えることができるのかな？』

いろんな考え方があからね。

正解はひとつではないんだよ。」

「ホントだ。いつでも、自分は

二つにひとつの考え方をしているかもしれません。」

「そうだね。そこに気がつけるところが、ライくん、君の頭の素晴らしい柔軟さだ。薬草のことは、私ならこう考えるよ。

『薬草を手に入れるこの旅も、目指すゴールまでの道のりの、90%ぐらいのところまで来たな。』

・・・つまり、手に入れるところまで、もうすぐそこだという解釈だ。」

「確かにそうですね。
でも、もしこれで薬草を手に入れられなかったら、
『手に入らなかった』と言う判断になります。」

「そうだね。確かに結果は、『手に入らなかった』かもしれない。

結果だけを見ると、二つにひとつの考え方になってしまう。
でも、あと10%のところまで、頑張れてるわけだ。

結果をみて、二つにひとつの考え方をしようとしたら、
99%できてても、100%にならない限り、
『手に入らなかった』になってしまうだろ。」

「そういうことですね。」

「人間は、黒か白か、どちらかに判断をつけたがってしまう。
それが正しいことだと、思い込んでいるからなんだ。
99%できているのにダメ！
100%できてないからダメ！という風に、
『二つにひとつ』の考え方は、もの凄く自分を痛めつけていると、思わないかい。」

「そうかもしれません」

「ライくん、『二つにひとつ』の考え方が、みんなをととても苦しめていることが、分かってくれたかい。」

「はい。分かりました。僕もいつも『二つにひとつ』の考え方をしていると思います。だから、結果を出そうと思う時は、例え作業が90%終わっていても、結果を出せていないことに意識を向けることになって、そんな自分は『ダメだ!』と、自分を責めることになるんですね。」

「そうだ。その通り。さすが、ライくんはもの分かりが良い。」

「ありがとうございます。これって、すごく重要なことですね。」

「そうなんだ。この『二つにひとつの考え方』の思いこみのクセが、みんなが元気を失い、力を出せなくなっている、最大の理由なんだ。」

「そうなのか。だから、みんな『思いこみ』で、力を失っている・・・、とおっしゃったんですね。」

「そう言うことだ。みんな、『二つにひとつの考え方』をして、ほとんどのことが、

『できない』

『悪い』

『あってない』になってしまう。

そして、極めつけは、『そんな自分はダメだ』と思い込む。このようなマイナスなことを、必死に探し出すクセによって、みんなエネルギーを奪われることになるんだ。」

「知らず知らずに、そんなクセを我々はやっているんですね。」

「無意識にやっているところが、問題なんだ。無意識だから、これが自分にどれくらいの影響を及ぼしているのか、気がつかないでいる。」

「それはそうですね。無意識ですもんね。」

「気がついてはいないが、確実に、毎日毎日、一時も休まず、繰り返し、しているので、自分の持っているエネルギーは、どんどん消費されている。」

「エネルギーって・・・、人間のエネルギーはどこにあるんですか。」

「人間のエネルギーは、心の中にあるんだよ。」

「心の中か。考えたこともなかった。心のエネルギーを消費し続けると、どうなるんですか？」

「心のエネルギーを使い果たしてしまった人は、単純に考えても分かるように、エネルギー切れになる。」

「エネルギー切れか。」

「そう、エネルギー切れしてしまった、ロボットのように、

当然、動けなくなるわけだ。」

「どうしたら、エネルギーを充填できるんですか。」

「そもそも、心のエネルギーについて、みんな考えたことないわけだから、意識的に、充填する方法は、何一つ知らない。」

**「それは、そうですね。
心のエネルギーなんて、考えたこと、ありませんでした。」**

**「エネルギーを充填することも大切だけど、
『二つにひとつの考え方』で、自分のエネルギーを
無駄に使い続けていることを、やめることが先決なんだよ。
そうしないと、仮に心のエネルギーを充填しても、
充填するそばから、無駄に消費することになってしまう。」**

**「そうですね。分かりました。
みんなエネルギーを消費し尽くして、
元気を失い、動けなくなっているんですね。」**

**「そういうこと。病気と言えば病気だが、
分かりやすく言えば、エネルギー切れだ。」**

「エネルギー切れか・・・」

**「さあ、問題点が分かったら、
どう解決するか、そこを考えるのが大切だ。」**

「そうですね。どうしたらいいんですか？」

「無駄なエネルギー消費をやめることだ。」

「無駄なエネルギー消費をやめる・・・、
と言われても・・・、『二つにひとつの考え方』を
しないようにする・・・ということですか。」

「そう。そうすれば、自ずと、『自分はダメな人間だ!』と
は思わなくなる。そして、消費しないですんだエネルギーを、
自分がやりたいことに使うことができるようになる。」

「なるほど、そうなんですね。
でも、これまで無意識にクセになっている考え方を、
そうあっさり、変えられるものですかね。」

「さすが、ライくん。
いいところに目をつけたね。そこが重要なポイントだ。」

「そうですか、なんかほめられて、うれしいです。」

「どうしたら、みんなの考え方が変わると思う。」

「そうだなあ、みんなの思い込みをなくさなきゃダメですよ
ね。新しい考え方を取り入れてもらわなきゃ、いけないわけ
ですから・・・、
凝り固まった考え方を、変えなくちゃいけないわけで・・・。」

「うん、いいぞ、いいぞ。」

「みんなが頭を柔らかくして、話を聞いてくれないとダメか
な・・・
・・・あっ!
薬草『キズキ』ですね。」

**「大正解だ！
薬草『キズキ』の効用は、脳に作用して考え方を柔軟にして
くれる。」**

**「そうか・・・、だから、
僕の村には、薬草『キズキ』が必要なんですね。」**

**「そう言うことだ。ライくん、君のこの旅は、大いに意味が
あることが分かってきたね。」**

**「はい、分かりました。
薬草『キズキ』を村の人達を救うために持って帰ることは、
大いに意味があります。」**

**「ライくん、ここまで話を進めておいて、ちょっと言い難い
んだが・・・」**

「何ですか？突然、そんな深刻そうな顔をして。」

「薬草『キズキ』なんだが・・・」

「まさか、・・・無いなんて話じゃないですよ。(笑)」

「その、・・・まさか・・・なんだよ。」

「えっ、またまた冗談を・・・」

「いや、冗談ではないんだ。」

「なっ、なんでですか？全然ないんですか。」

「薬草『キズキ』は、その昔、森にたくさん茂っていたんだ。しかし、この地方で、やはりエネルギー切れが流行してね、みんな、後先考えずに薬草『キズキ』を、とりまくってしまったんだ。何とか保護しようと、この城で残りわずかを管理していたんだが、昨年とうとう最後のひと株も摘み取ってしまったんだ。」

「もうどこにも・・・、ひと株もないんですか。」

「昨年、遠い海の向こうから来た青年も、同じように聞いてきたよ。手ぶらで帰らせるにはあまりに忍びなくて、残しておいた最後のひと株を渡してしまったんだ。」

「じゃ、薬草『キズキ』は・・・、もうどこにもないんですね。」

「残念だが、そういうことなんだ。」

「僕はどうしたら、いいんですか。村のみんなを助けられないじゃないですか。」

「すまない。せっかく長い旅をしてきたのに・・・。」

「どうしよう？僕は村の人たちになんて伝えればいいんですか？・・・僕のこの旅は意味のないものだったということですね。」

「いや、そんなことはないよ。薬草『キズキ』は、あくまで考え方を柔軟にする作用があるだけだ。」

大切なのは、心の変化なんだよ。」

「・・・心の変化？」

「本当にみんなのエネルギー切れを直すのは、考え方が柔軟になったあとで、新しい考え方を伝え、みんなの心の変化を起こせるかどうかにかかっているんだ。」

「・・・」

「たしかに心の変化を起こしやすくするため、新しい考え方を受け入れやすくするには、薬草『キズキ』の効果は大きいわけだけれども、必ずしも必要なものではないんだよ。」

「薬草『キズキ』がなくても、村の人たちを助けることができるということですか。」

「そうだよ。むしろ本当に大切なのは、薬草『キズキ』ではなく、心の変化をいかに起こすことができるかどうかなんだ。」

「その心の変化をみんなに起こさせるだけの力が、僕にあるでしょうか？」

「もちろん、あるさ。そのために君はこの旅をして来たんじゃないか。君はこの旅を通して、大切な考え方を伝えることを体験してきたんだよ。」

「えっ、そうだったんですか。じゃ、僕の旅の話を伝えればいいんですか？」

「そのとおり。
そうすれば、みんなが元気を失い、力が出なくなっている理由と、改善ポイントが伝えられるよ。
ライくん、君が旅から学んだことを、ここでまとめて話してごらん。」

「はい。えーと、まずは、これまで自分が持っていた『思い込み』ですね。」

「そうだ。」

「今知っていることがすべてだと考える『思い込み』から、『できた・できない』『良い・悪い』などという、『二つにひとつ』の発想をしてしまい、『できていない自分はダメだ』と自分を責めて、エネルギーを失ってしまうんですよね。」

「そのとおり。
パーフェクトだ！
素晴らしいね、ライくん」

「ありがとうございます。
だから、我々はまだまだ知らないことがたくさんあるという事実を受けとめて、『二つにひとつ』の考え方を手放すことで、『自分責め』をしなくなるんですよね。」

「そうすれば、本当にやりたいことに自分の心のエネルギーを使うことができるようになるわけさ。」

「よく分かりました。このことを、みんなに伝えればいいのですね。僕やってみます。」

「頑張れよ。村の人たちみんなを助けるのは、少し時間がかかるかもしれないけど、ライくん、君なら必ずできるよ。」

「はい、頑張ります。

『できないかも』なんて考え方はしないで、やれることを一歩ずつやっています。

だって、ぼくは、村のみんなを救いたんですから。

伝わるまで続けるだけですよね。

ぼくのエネルギーはもうなくなりませんからね。」

「頼もしいな。

ライくん、君は本当に成長したね。

また、この城に遊びにおいて、その時にはさらに大切な話を聞かせてあげよう。」

「はい、ありがとうございます。

村の人たちを助けたら、必ず、遊びにきます。大切なことをいろいろ教えていただき、本当に感謝しています。」

「気をつけて、帰るんだよ。」

「さようなら。」

【エピローグ】

「どうだい、ライ。なかなかの力作だろう。」

「お父さん、ものすごい大作になったんだね。」

「ライが書いた『見えないやりの使い方』に負けないように、お父さんも書こうと思っていたら、つつい力が入って、ずいぶん長い話が出来上がってしまったよ。」

「でも、すごくいいよ、これ。友達に読ませてもいいかな。」

「ありがとう、ライ。もちろん、いいとも。ぜひ読んでもらってくれ。みんな気に入ってくれるといいな。」

「絶対、気に入るさ。ぼく、早速見せに行ってくるね。行ってきま〜す。」

「行ってらっしゃい。気をつけてな。」

おしまい



☆人生ドクター☆じーこ 澤田 Koji Sawada

心のケアのできる総入れ歯専門医
心育てのリアルアイセミナー

<http://souireba.com/>
<http://jikolize.com/>

2011年7月20日